



TITLE:

獅子座流星群の観測

AUTHOR(S):

古川, 龍城

CITATION:

古川, 龍城. 獅子座流星群の観測. 天界 1920, 1(3): 42-44

ISSUE DATE:

1920-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159536>

RIGHT:

獅子座流星群の觀測

京都大學天文臺 古川 龍城

晴夜天空を仰望する際時々出現する流星なる現象は一見個々の物に何等關係無き如くなれども、其等の若干の尾を延長する時は略一點に集中する傾向ありて、其の點は大凡そ地球上に一定する者で之れを輻射點と稱する。其の輻射點の生ずる理由は恰も吾人が並行せる市街の兩側を透見する際、其の兩端漸次接近せるを見る如くで、太陽の周圍を運行せる流星の大集團は各並行せる者なれば夫等が地球上に墜下するに當り宛も一點より發射せるが如く見わるは理の當然である。其の輻射點の存在せる星座に因み、獅子座流星群又は琴座、ペルセウス座、アンドロメダ

座、水瓶座等の各流星群があり、其等は恐らくは彗星體の崩壊して生ずる者の如く、ペルセウス座流星群はタツトル彗星と、獅子座のはテンペル彗星と、アンドロメダ座のはビール彗星と各軌道を一にせるは注目すべき現象である。今論ずる者は獅子座流星群で毎年十一月十五、十六、十七の凡そ三日間に出現する物で、又三十三年目毎には殊に夥だしく雨の如く降るが、最近には大正二十一年のを待たなければならぬ。其處で考ふべきは地球が一定の時日に流星雨に出會する事は全軌道に略一様に散在せる流星の軌道に遭遇する事を意味し、又三十三年毎に大流星雨に邂逅するは流星の軌道に殊に凝集せる部分があつて、時に地球が其の部分に衝突する事が解る。

余の天文好^りし経路に就いて

岡山支部員 水野 千里

去十一月二十一日から二十三日迄三日間、岡山で天文同好會の地方に於ける第一回のプロバガンダがあつた。わざわざ山本理學士は御出で下さつて公開講演會三回其の他二回都合五回平易に熱烈にかつ誠意を以つて難解の天文學の知識を解し易く、岡山地方人に御興へ下さつた事を深く感謝致します。先生人格の崇高なるは日一日接する毎に感ぜられ、深遠なる學理をも平易に惇々として説かれ倦むなく、相手に因つて次第にその程度を高められ到る所多數の聽講者ありて斡旋しました私は非常に嬉しくて嬉しくてなりませんでした。その際先生は余に變光星の研究を奨められ尙ほ星座の略解、天文好なりし経路に就いて「天界」に出しては如何にその御言葉があらましたのでつたらぬ繰言でありますけれども徒然の折に御一讀下されば光榮とするところであります。

明治三十二年三月岡山中學校を卒業しまして士官候補生に採用せられ、京都府下福知山歩兵第二十聯隊に七人中の首席を以て入隊し將

扱て流星を精密に観測するは左迄困難な事では無く、時計、星圖、鉛筆、ノートさへあれば十分で、先づ其の一つ々の出現の時刻、繼續時間、長さ、出現、消失の兩點、等級、色彩、音響(あれば)、形狀等を迅速に觀察記錄せねばならない。其の長さ方向等は直ちに星圖に記入し、他はノートに書けばよい。熟練すればさして困難で

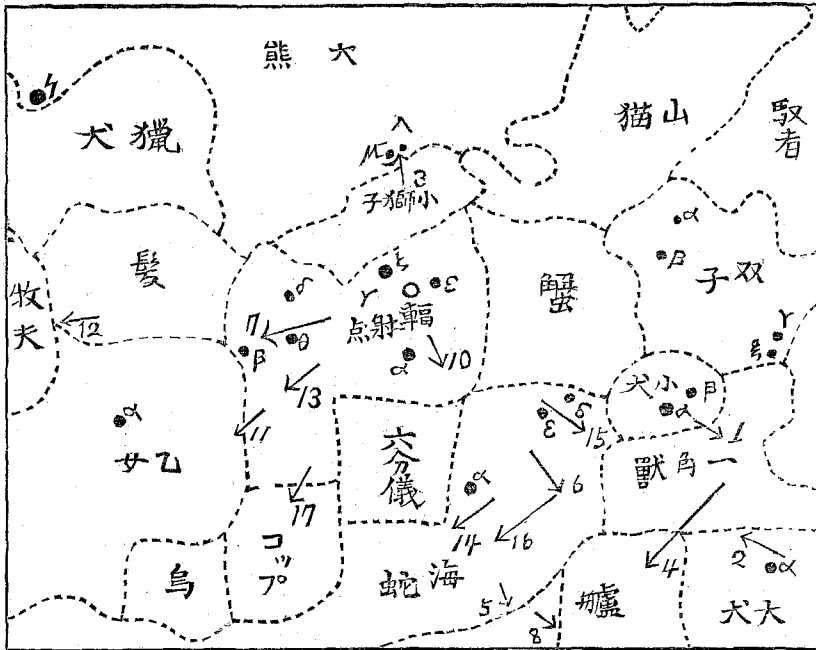
も無いが、時間を多く費さねばならないのは稍苦痛とする所である。自分は大正九年十一月獅子座の流星群を十五日午前三時十五分から五時十五分まで丁度二時間観測して十七個を捕へたが、其の中、表の二、四、一四、一六は本流星群に屬する者では無い。又輻射點は獅子星座のガンマ星とエプシロン星との中間に在る。

大正九年十一月十五日朝 流星觀測報告 (古川)

番號	出現時刻	光	路程	時間
1	2時34分	4等	6度	0.3秒
2	2 38	5	4	0.3
3	2 42	4	7	0.4
4	2 50	2	18	0.6
5	2 5	4	8	0.4
6	2 57	4	4	0.2
7	3 1	2	12	0.5
8	3 5	4	5	0.2
9	3 10	6	4	0.2
10	3 14	3	4	0.4
11	3 18	5	3	0.3
12	3 20	3	8	0.5
13	3 26	5	3	0.3
14	3 29	4	6	0.4
15	3 38	5	4	0.2
16	3 45	4	5	0.3
17	3 49	3	4	0.3

來將校たるべき第一階段を首尾よくパス致しましたが好事魔多く其の目的を達することを得ずして一下士となり在郷の人となりました。するゝ忽ちパンの問題が起り前年父は逝いて歸らず五人の弟を始末する責任は小生の双肩にありますので、將來何を以て身を立てべきかを考へ中學時代比較的成績の好かつた、地理科の研究に身を委れんものと決心し早速勉強に取りかかり文部省の中等教員檢定試験を出願しましたけれど中々容易には合格出来ません。その中に日露の風雲急になり遂に旗號の間に見ゆることとなり、明治三十七年六月充員の爲め召集せられ第十師團の後備聯隊に編入せられ七月滿洲に上陸し拆木城と遼陽との攻撃に参加し彈丸雨の許に命を全うし九月第四軍司令部附を拜命沙河奉天の兩會戰に參與、明治三十九年一月東京に凱旋しました。それから地理科研究中最も困難を感じたのは鑛物、岩石に關すること、天界に關することでありましたが、幸ひ當地には六高教授を主幹させる博物學會があるのでこれに入會致しまして、地理科に必要な鑛物、岩石に就いては聊か得るところが出来たことを深く同會に感謝致します。一方天文に關す

星流の群座獅子



大正九年十一月十五日午前三時より同五時まで

(觀測者古川龍城)

る方は良師なく難解々々！されど肉眼にて見るところの天界の美観捨つべからざるものがあります、教訓の意を含むこと多大なる宇宙研究を止むべきではありません。明治四十年星座早見出版せられ、後新撰恒星圖世に出でましたので、研究上に多大の便宜がありました。明治四十三年ハレー彗星出現の際に日本天文學會に入會して天文月報を第一號より購入し、中學時代より天文學に關する邦文書を蒐集し繙讀する内に次第に興味を生じ旅行好の小生は東北地方より九州地方は鹿児島、四國山陰方面も足跡を印せしめて、その間夜間には常に星を友とし利益を得たことは尠少なからざるものがあります。特筆すべきは、大正五年一月三日夕刻水澤にて木村博士の溫容に接したことで今に髣髴として顔前に先生の御姿が現はれます。その時山本先生は水澤臨時緯度觀測所研究室にいらつしやつたことを今回承り奇遇を感じたのであります。

本年九月天文同好會創立の御計畫を新聞紙上にて見ます早速同會規則書を取寄せ入會致しましたら發會式に御案内を辱うし恐縮の至りでありました。それから益々天界に親み、精神修養には常に晴夜仰いで星辰界の壯麗に